

5
1910
2

俳諧

み、な草、下 晋子句解

表氣肝螺窗翁遺稿

其角堂永機編
小築庵春湖校

暁

哥まハ一字解と云俳諧まハキリ解と云
一字の解を句解と云

をより閑をくさしや梅の花

長上の今梅を贈ると暁閑のなぞ起し梅を
折誠意言ぬ、何れと云さし下、を為長者
折枝の意を念あるなる也

累編意高

この物の言をいひし 梅は是別ものばや
かひのほははははの けのふこしし何を
君か

橋本を画し

舟にせるのり 継と何のそつん

梅盛

家宿の梅のこらねやこつん

思いのぬる君か 舟にせるのり けのふこしし何を
橋本を言けいふ也

万葉志ふまの 朱雀の柳とけり

所々のりいおを

きりくく西の虎しり 雲のりり

万葉の朱雀の柳とけり 朱雀今の高

形その名なれハ万葉の時作のけり こといふ

なし 催馬虫は緑のけり こといふ

そのけりいふとみるましり 玉光る下いふ 志ん

きやうすけりりきり 舟にせるのり

せんがい林をきり こといふ けのふこしし何を

と何れとんきや入新魚と今の高也

け新文例の活氣とけり 社撰のやれ こといふ

きよのまのりりあてりけり画漢のそと

階子くくもはりり乃よ燕うお

万世あう鳥総をてりりまのり

ひるのゆき鼓あつりし

難波の漁、そのち鼓ハ波ぬも入るるそと
あつりてあつり、何のゆき、あつりてあつり

仁和寺

いふつりのあつりあつり梅水

金剛經曰如多幻泡影如露亦如電 仁和の帝ハ

あつりてあつり、あつりてあつり、あつりてあつり

懐古十分也一向の向すり且鐘

川柳をばはふおあつり、あつりてあつり

所用よふて見りてあつり死のそ

白詩 臺頭有酒鶯呼客

雜司谷

山里ハ人をあつりてあつりてあつり

形芳く花のま白く霞也あつてまよふ水の
やうな山里六橋の雲さあまのあけあつて
月清集のまよ白くハ記臆の誤なり

花の種をこのまいへ 喧嘩買

雲林院ノ謠まよの月ハあつて花をちりまよ
雪の羽袖はあつて花のまよまよハまよまよ
あつてあつてあつてあつてあつてあつて
いとも人の花根藉のくまよまよ

心あつて神歌あつてあつて

西川の画の預し 心あつてあつてあつて
ゆき西川あつてあつてあつてあつて

子記一二の橋乃おのり

寛政の次の版中々所二目二目の花を
爽裕の禪の禪の茶活しとて一二のあつて
三のあつてあつてあつてあつてあつて
一二八四と十五のあつてあつてあつて
歌梅子の百のあつてあつてあつてあつて

新うすうおとしをて十五の初回とりのかま
一白立くくくくくくくくくくくくくくくくく
何なる位のぼくくくくくくくくくくくくくくく
吟とゆめやす方程何のくくく

ま湖言 雍州府志に云く所東福まつお大和古道く小橋五初く、
阿まをく一の橋次をを二の橋とくくくくくくくくくくくくくくく
あ向くましく白煮間に發り客又回カサリ

林中不賣新

せうあくくくくくくくくくくくくくくくくく

あまのくくくくくくくくくくくくくくくくく

席令初て上京く銭

西行

涼くくくくくくくくくくくくくくくくく

揚別霍とのくくくくくくくくくくくくくくくくく
意あ

くくくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくく
古今物名

西行と曲花坊くくくくくくく

西行くくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくく

此碑は八江を哀まの堂下

元禄七年十一月二十一日 糸生禁門の碑を述る

唐哀江頭碑あり 叔子墮渡の碑ト云

遊子残月

即ちの月おのゝし涼下

往りのて心を切するま山里の阿多

くまぬきしお平のわらわ

後成

お仙貫之の古倉

冠の指をさあつて 委り汗

も 實定といふ殿さまは冠をさきし時

りよりハ記の母身之に在りし時 沈の實定ら

野有せハ殿上座されり 後ま 討つる

と飛んけの向をへ殿の御世して生の松りの

うこをよん

木曾御とや涼おし味を志ら

新古今 琵琶の后大皇后

すし けの生の和り 増しよまの扇の

ゆれりしよし 韻塞ある 扇の形を畠し 許六 贈る

いつ

二星ねむ隣の一むすめ年十五

軍旗かぶ旗しすまこ也

軍旗ありて

秋の果の月毛の羽よけのふりかき
うけあし時のまきこころ

軍旗ねむ隣の一むすめ年十五
一むすめ年十五のむすめ

維摩のあし

山のそへ大衆しりう 座のり

三千の大衆を僅方丈の室に入らば維摩の法例なり
山影入門雖押不出 山の影を大衆しりう
座を方丈しりう

母を月さけるか

月さけるか 雨元政り十三夜

月さけるか 雨元政り十三夜
文はしりう 月さけるか 雨元政り十三夜
月さけるか 雨元政り十三夜

宗因を月さけるか

辛八く 元徳都の二百貫

辛八く 元徳都の二百貫 宗因

二星ねむ隣の一むすめ年十五

白文文集 隣家穰服歳

送る火や定家の徳十文字

大空をきく山の様子をいふは果ての
くらげ形
定家

好子方三節を傳て

お祈りうらやみおのせ

尺く蟬鬢は雲着たり
松風をいひ
うらやみうらやみうらやみ
うらやみ

中の御ま

幸傳る身へのゆきや青松

幸傳る身へのゆきや青松
幸傳る身へのゆきや青松
幸傳る身へのゆきや青松
幸傳る身へのゆきや青松

芳のまことのゆきや青松
舟代の清澄のまことのゆきや青松

三葉を納

御名一兩といふ

お稲酒や稲荷のちりあつた

之縁年廻三圍社内へ焼く茶をいひ
昨夜狐おあつた供物を持去りし
民位に彼徳う右縁あり

因に古草堂再建の折
開き堀

二百一年とさうの古井を

堀あつたといふ社
社殿の旧記をいふ

やあつたといふ社
社殿の旧記をいふ

鳴るは、彼蟬の音、
何れも昔は、
斎青胤歌

芦刈のうを、
大和物

若水くしあ、
浦ハミ

何れも、
浦ハミ

ひもの、
隣家

大絃ハ、
大絃

琵琶行、
昔を

太二、
太二

ひげ、
峯入

嶮沮し

松のふその火をけけ存醬油

けり維ナと
りてまけ

まは集まけけのひて 題よて

河引の山下火々燃ゆりてまの火

をけけ衣けりなん

大山

獨押やゑる岩根乃ちちみち

智馬といふ人の文し

十八町の岩壁を九丈まてしを切しわん

しり是親に小使さむまをしりせき(孝林の

名をたししにやの音角の音をたしし陣下

二使おる世の音はたしし

えはたのあ貫ちささりてしりし 獨押の

まのまはしりてしり

みは赤まはしり教つる酒のうん

林間暖酒焼紅葉 白詩の意を和しりたる

まはるる八五九集書史の語して教つるしりてしり句

おるとしり使つるしり

平泉おのりる名院の河にわたりてしりしり

しりし切字定しりしりしりてしりてしり何の余音りてしり

白扇倒懸東海天とつる白つゆけし
箱して手は空しくしる心ちせしるこの
あしこぎ芳立初冬のて山の半版とら
つらつらとるを要するすもいそん
ほりちるごとし 白扇倒ハ石川又山の持より

白雲の西より来る普賢富士

江口の瀧、普賢をまつてかへる舟ハ白衆と形つ
まるとやむゆり白妙の白雲よち舞かして雲の空
りなふ 古文活集
秋風起る白雲飛
たつと一向の上秋暮

吉田氏

唐柜か糸をよれりま向か

留け揚身このまうく谷まをくみれの四隅くまを
弦を佛よま向くまのり
又花を佛情は出まくの香を弾く包て五色の糸
弦けく佛よまをくみ 唐柜のまうくまの
やうぬものり 中七み字時あり

守山の子あやうね青何あふ

大津地居たり歌ま 守山のいとまの
あうまうまのり

大津澤

千觀のるいせのしつやのる

千觀の僧し元亨秋書

大津の歌は馬士たしし世を安し人
隠逸傳ものせり

右五十五章ハ螺窓翁遺草の粗釋也

百韻

嵐軒屋

梵をもちあまてのる 光りわすもあ 塗靴中ノ晴暑袴り 其角ぬれぬ お居る水菓をけ 日和の座中ノ すめ子の業を はあまわし 入る	霜の の 裂れし の け の 大袴 立智の 際	氷 雲 枯 正 古 菟 好
--	---	---------------------------------

ウ

庭園をめぐりし花は八つ。をばく
 ちとつておぼしきとまきし窓残
 ぬきこめてきた下おぼしきも菫
 へのの暑れをいふ花もあつこ
 土用はひる夜とあつこつて
 歳より花と女房新し
 姉さるのあつこつて有馬筆
 峯の何しとつてつてのつら
 音園の却しつてつてつてつて
 おつてつてつてつてつてつて

梅高
 苗我
 笠仙
 歩月
 三升
 梅章
 高島
 松方
 三瀬
 於一

摺小舟を漕ぐおぼしきつてつてつて
 舟つてつてつてつてつてつて
 とおつてつてつてつてつてつて
 雛子啼つてつてつてつてつて
 のつてつてつてつてつてつて
 今所つてつてつてつてつてつて
 花つてつてつてつてつてつて
 眼つてつてつてつてつてつて
 つてつてつてつてつてつてつて
 都つてつてつてつてつてつて

梅高
 玉仙
 静和
 柏我
 正雄
 麦亦
 雪居
 泉雨
 華如
 まふ

道つきの溜上りも形こそ
 次亀汁のしほり何う着
 おものどりの裏の符一宿
 くの香車一に附本引き
 寂糸の何の魚板り気も
 夕のそふ後す岨のりり
 月の宵々空の二階を流ゆ
 能くはる足袋の対切
 醒れ入作た多の能ち
 蜀石の形くふする戀聲

孝節
 招呂
 光栄
 吟聲
 物繁
 永園
 希川
 不及
 素直
 文都

門を中結くむす三四人
 こころぬ小きり春ひたさ
 魚の子もなるををる
 薬も何となく是ともあり
 如くも鼎野もさのりさ
 土神の上を猫り飛こす
 する宿の裡りやう言候
 ぬるりすの通り供
 石垣子雪踏の流を独山
 毛利 ぬの利まか

柳春
 永二
 貴季
 於月
 春江
 雪雨
 醉南
 枯竹
 招氏
 吳仙

けさる百人の薄の膳部立
 のみさのしりく煮るか
 もろこね。けのふ舟解致
 鰭おろくろふあはくおも
 羽さまを流る子よ思。望
 しくくしり成を隠さ心
 時よまゆ油室のまくら我を
 醜はあゆの福んれし
 片おしりけの念佛入かぬ
 新おろくろこりかこく

春洞
 採るの
 素石
 空狂
 源輝
 照字
 結音
 附徳
 大雲
 古衆

けかし博たふといは
 りをいしりし
 むろくし居か
 節よあし月の成の
 ぼら塔何ひし
 せしり三ふ
 依の春のほま
 きのの翁を

者我
 長龍
 宇山
 何山
 尋香
 成雅
 常空
 素水
 田好
 美尼

長き道の遊幸するも 表甲
花のさくらし 狭き門口
何れをよみまも下戸の仲間
あしこの川に謡 一者
風小ぬく日之涼しく世の事
ともしもを我々の名物
茶をいらの香こぬる娘にして
くぬりお置らきま志まき
幽植中の痛の憂とを風
瘴いらしくと日並 強ふ

菟石
花全
匠月
流翠
浮美
園所
蓬兵
碧石
梅年
蓮州

ナヲ

多かきき一切経會まじ海す
懐ふ子とものよわぬ水く懐て
山々の目方形に柿葉打
つらとよの遠い歌の権をな
白雪のつを限るも瘴つらり
豆敷あつとく 盆ののせり
弟著入は海なる 吉野織
あつとく 姪の 孫く
後をたぐふそのまゝ 若て初日
招葉 招ふり 中の流す

木突
巨石
休閑
竜吟
於暇
在鳥
逸作
晉江
梅年
梅友

何れもさうなまゝに虫籠の雲として
 海原をよめさる柏子よの音
 突合ふのつらきなり五月の友
 菌小笠よあり降し旬
 信心の秋何とこな秋葉山
 村と結成の晴あゝ人
 さらけの肉を名入る様とて
 のまゝに護謄のうらまへは皆
 清合よまの天気の思ふ
 とさうまの色のまの海

其峰
 梅丘
 お裁
 亀池
 芦水
 夢外
 画外
 勝歩
 稻所
 紫垣

前世界よりいへば花啼て
 水とてりけ成とてふあう日
 百身よのまじりて
 田のまじりてあうりけり
 赤いものまじりて
 山とてりてあうりけり
 けりけりけりけりけり
 八雲谷とてりてあうりけり

酒量多
 一景
 糸垣
 羊山
 静所

神祖

神のや大神堂へ一法を
くく馬屋へつる繩下をゆく

其角
亂斬

ぬ阜いぬその氷社

祭見のくわひ入道八幡くら

祖康

な結四五十串をさるる氷

雪笠

をさる子のお立あつ夜もあつ

露草

の氷入祭日のあつる氷

松島

氷神系口伝えのどりのあつ

雪原

歳とせのねらひ結んで方陸中

春江

はらり九塔うまみの競る

投山

あつりねらひるまふ大根接

涼塚

こらりすするのつ旅あつる

徐東

祭りの里をゆくとして新海へ

採花女

移るやうに新海を解る

幸洲

三遠

福りやねらひるる氷の道

氷嶺

釋教

佛とらけりりの也る日おん

具角

所を夜ハまうしんお佛生會

嵐軒

嵐軒居士三十三回 各前文略

おのりよ。二中板四世を月

春湖

名をまけハるのみ衆 衆のゆ

芥舎

那うしきるのいまり 此の衆

蓬子

わらさの衆は保なす 花の色

浪水

うしりのおのりきるをい衆は

添美

咲て花ちる三十衆や此のく道

砂水

那きとれい道の中名のてまみ衆は

波色

妙法のはや遠らるしては供衆ら

南歌

しん衆は昔きちるふみ回りの

益庭

みのろりや高らるしきよ一ま向

十洲

高らるちまのいしん衆は見し衆は

燕皮

衆は四し何はらのゆゆは

竹苗

このまをいしあしてま向はまこのふ

敏樹

古井及う海はまの日の廣

極紫

草の茂るは入衆 此の衆

大畚

月影はまのうり軒の招

素石

中膳の如く向をいつたり草の如
 草の如く茶の如くつらつらと
 神事の内と立立の品と
 何れもとおもはるる
 後の戸内草一はら子真糸
 とは世の如くわらわらと

福

みのりーヤ三十年八喜みの如
 けきき海一と官ん莫るつら

永福
 梅年

画

お城わけてなみこととの皆
 ち作 下に荷をわらの流 建

おもひや成るる

色まなま男中の色の小袖
 着のうとしてお日中の涼
 せえの娘のとて成音不
 のは戸見を隠すといふ草のふ
 毛一はを居るまゝくわの月
 送るく物よさをあせうな

其角
 嵐所
 草志
 お裁
 静和
 素水
 吳仙
 落英

人結る六門の春あはる事卯うな
 粧もて牡丹中へ向ふ女この春
 待其まの心あはれ神をく舞あや
 物さそくもすりぬ解しこりぬ
 ひろく夜つ遠きこ砧をへ眼もぬ
 春の平や誰をたすのの上草履
 秋色ハナぬみくもるこ糸はけり
 春湖

初雪のまの雪のふりよりの春あはる祖芝の口賃ぬり
 へしけむのをうしゆりぬる大まきこりぬ
 むらりぬるをぬるぬり

白あはる春草のやどの春あはる 亦柳

無常

辞也

くらきこくとわさる粒の秋の暮 嵐肝
 代野や焼もらるの骨とぬり 其角
 春のこまのりるに
 水月ハ春のちり也茶碗くゆ 華谷
 世路のりしつと何れもよ海の冬 蓬宇
 冬雪の四道送るし
 多しむらぬるもゆり老を先 春向
 芽子あはるぬり世の送る 畠水

時多ふの湯 一 河く弓魂 後 海舟

又の遺歌及葬の語を記し
起ふのりゆわいをなせ

村々を我頼體しし神を宿のり
水御

名所地名

三尺の血を面何なり 一 公のり
ひらひらめ坂やうん神や三輪の松 嵐所

墨水 彦を錦 一 人の織りゆく也 海舟高

ひは足を君に懐きしをこの梅 梅水

洗葉うたれゆく色や京の町 煮石

美水 多かるる啼きしをこのり 貴子 六狂

三つくちの舟の文所	啼	性	舞出
幾より月をくく	川	宮戸川	浣江
ふきの南引出す	水	鈴うね	藤村
新比内	福	毛の跡	の日和
多遊	の	舞	の
我花	那	の	日向
新日山	た	ん	の
竹	生	を	山
花	根	山	雪
雪	生	根	山

三つくちの舟の文所	啼	性	舞出
幾より月をくく	川	宮戸川	浣江
ふきの南引出す	水	鈴うね	藤村
新比内	福	毛の跡	の日和
多遊	の	舞	の
我花	那	の	日向
新日山	た	ん	の
竹	生	を	山
花	根	山	雪
雪	生	根	山

二三宿たよま東より子曲川
浅州しやましくるぬれ杜の隣
まのまのま西面ぬり善光寺
ち谷つのも言ちしつとまらふ
まらふみ滝たぬりし那智の只

高野

まらふしと我度世のたの楽の院

但康
まの隣
雪洋
お到
まの
お樹

体懐

子成りて入成つぬるまのの道
花咲ぬぬらぬ母己柳のぬ
喜まらぬし

子を抱くぬのの習ふまらぬ
内らるるま世を遊遊しよれと音
先我の成し涼しき役者
あつらふ枝のまらぬ人の上
まらぬぬらぬぬらぬぬらぬ
まらぬぬらぬぬらぬぬらぬ

其角
藤野
壽丸
竺仙
梅幸
涼坪
和親
東京
暖色

夕はらうをまほぬあふあふ	繪かきつるの松を	草花のまを	牡丹さとし	牡丹さとし	牡丹さとし	牡丹さとし	牡丹さとし	牡丹さとし	牡丹さとし
永城	梅意	香瓦	金羅	年出	桂苑	あ流	三瀬		

旅仲

道の星の足	花の香	馬を	其角
花の香	花の香	馬を	其角
花の香	花の香	馬を	其角
花の香	花の香	馬を	其角
花の香	花の香	馬を	其角
花の香	花の香	馬を	其角
花の香	花の香	馬を	其角
花の香	花の香	馬を	其角
花の香	花の香	馬を	其角
花の香	花の香	馬を	其角

夕陽をいづる宿の影を
薄の縁に似ての友あり
露の玉のしるも草鞋のまね
旅人の寄る所はしるも
妻の山根よりけり
を面をわたりてゆる谷のふ

日向のよみ

夏は涼し山ありけり九十九

は丸くと筑はあのみやめ

鮮魚
舞臺
の金
雪雨
梅年

浪を
白浪

祝

祝壽育

たぐい風の波も膝の緒つと

其角

西城の初候のおくし祖父志刺若匠候
奉りてこころしういふ字はなれ
五回ふもあのみまては
そく家室はけんをいふるを

子のみことおと根さ

嵐軒

竹有佳色

竹降る白の海も竹の艶
竹箸の青も竹の何んか

柳花
縁重

虎々々ありて控へてありてふまこ松	あり
古くはかきつりてけり	鹿好
寒き菊也とり金もよれ小唐皿	白鴉
子を連く雀の首向むるなり	二葉
中障よりの妻りもたす	木匠
新造やちまき基のけり	指並
ちりや新の子孫ととり金也	巨石
ちりやととわりの象こ柏も	精知
田代の尾鱗くまのの包	予雲
君代と雀も酒も橋あり	松家

いさゝのゆりやゆりす小盃	権号
山もつゆに控へてふ	壮山
若水もよるなり	素美
腰の船ぬきくはるなり	卜早
新造	
神々の声何れ傳代の門り松	河童
天下をよるをよる	
万民をよる	
蝶の舞をよる	和
	水榭

卯時混済

その涼を点滴をかり涼しく花
羽おぬる酒のちかやりのあつら
黄竹や甲を一二枚夏の心路

松翁
化堂
静湖

ゆるぎて初めのきり文あら

権富

葉の戸をぬくも早く初燕

金蘭

新顔やまのいよあけのさよ

連水

折るよれれまゝにるる河のな

梅富

捨つるやうに水吸ふ柳の柳

乙亥

山はるの涼しく梅りふ

月暹

新市やぬるるあつきのあ

如竹

月代の白くつと柳の何し

不角

赤くも花野のさるる花子

翠丸

赤くもあつた花のよのさ

風富

涼しくも花の白くあつた

為右

涼しくもあつた花のよのさ

曙之

花ついでにあつた花のよのさ

芳泉

新顔やまのいよあけのさよ

茂精

よの草のよのさるるあつた

東右

招鳩 文苑 他山
招鳩 文苑 他山
招鳩 文苑 他山

まのこぼれ雪の對を

毛の光り白くやけの光輝
石の光り白くやけの光輝
達人志やあまのついで
草の光り白くやけの光輝
水音より気のはれり
まのこぼれ雪の對を

魯文 梅丸 野字 羊仙 汲古

馬士のつげハなまの國より杜のぞ
名月の向うもろく推らまを
御入道より杜のぞ
紫の光り白くやけの光輝
三月の月日は乾き通ふ又月
水音より気のはれり

詩具通

立あてしよあまの作のま道の分
蒲の穂より白くやけの光輝
よのこぼれ雪の對を

素水 中庵

山崎 四つ目 寺の雪
物とて 新雪 入りし 杉梅
おせん 像もあ 満ちる まるく
牛麩の 何し 八知 尺我亦
望み 寺の 多勢 祈り

寺草
於月
一
江波
古庭

雅

降とて 小川の もれぬ 留士の 雪

お櫛

諧俳

み ち 草 尾

雪の 派七 世乃 主 永 操 使 こと 其
先考 標 窓 匠 土 の 法 屋 土 心 を 以
た なる 為 追 福 居士 の 遺 稿 の 其 亦
寸 なる 系 晋 子 子 志 志 及 び 解 成
上 本 して 玉 なる 玉 の なる あり 嗚 呼
つく ち ち ち ち 信 以 ち ち ち ち 哉 草 尾 あり 也
草 尾 なる 雪 なる あり なる なる なる 也

同日一法ありきぬ因てあはれはるる
去りては先草を採りてとらふ如
明後年と秋ハ月於麻布
孫芸圃著関

治年ハ子乃流黄



中居翁著

魏書古今和歌集遠鏡

水戸景山公選

四信司集

其角老著

俳諧八十六歌仙

追刻

明治十四年十月九日法届同年同月出版

編輯人

晋

永機

南葛飾区小梅村六十四番地

出版人

松崎半造

葛飾区酒蔵町十九番地

